

# NIC 日本語教室における「対話型」クラスの推進

公益財団法人名古屋国際センター 松岡 萌梨

## 教室概要

名古屋国際センターが運営する日本語教室。

- ・令和5年度より、教科書を用いたクラス活動から対話型のクラスに移行し、実施している。
- ・10代～60代の学生、就労者、子育て中の女性など、さまざまな属性の学習者が参加している。
- ・1ターム10回(3か月)のクラスの中で、各回、対話のための「テーマ」を設けている。
- ・開催日：毎週日曜日 10:00-11:30 および 12:00-13:30

## ◎課題の背景

自治体が日本語教育に責任を持つ一方で、地域の日本語教室には、多文化共生の拠点としての役割が期待されている。単に文型や表現を学ぶ場ではなく、学習者が「自分の生活で本当に使う日本語」を身につけ、地域とつながる場であることが重要である。

## ◎課題

- ① 対話型クラスの目的や重要性がボランティアに十分理解されておらず、「教える側」「教えられる側」を脱却した対等な関係の構築や、相互理解が進んでいない。  
<理想> 学習者だけでなくボランティアも学習者から学びを得る相互理解の場であってほしい。
- ② 教科書を用いたクラスと異なり、ボランティア側も学習者側も学習の成果を感じにくい。  
<理想> 対話型クラスこそ、生きた日本語のコミュニケーションを実践できる場であることをボランティアにも学習者にも実感してほしい。

## ◎課題解決に向けた実践内容

### 課題① 対話型クラスの目的や重要性がボランティアに十分理解されていない。

#### <実践内容>

#### (1) 「ノート」の使い方を伝える場を設定

- ・ボランティア向けの勉強会を実施し、ノートは、学習者だけでなく、ボランティアも活用するものであることを伝えた。その日のテーマについて、自身が「やさしい日本語」を用いて、どの程度アウトプットできるようになったかを振り返るツールとして位置づけた。
- ・相互理解のきっかけとなる「あいさつ」のページを追加した。

#### (2) 「テーマ」の改善

- ・ボランティアが学習者から引き出すだけでなく、自分自身のことも話すことができるテーマを設定した。(例:「あなたの国」→「わたしのふるさと あなたのふるさと」)

#### (3) ボランティア定期ミーティングの設定

- ・タームの終わりと初めにボランティア会議を設定し、アンケートの結果を共有したり、そこから見えてきた課題に対して話し合う機会、NICの考えを伝える機会を設けた。

#### <考えたこと・困難だったこと>

- ・実践期間中、ボランティアにアンケートを2回実施した中で、対話型クラスを実践できていると感じるボランティアが増加した。これにより方向性が間違っていないことは確認できた。
- ・主体はあくまでボランティアであるという前提を維持しつつ、トップダウンにならない形で、NICの考えを共有することの難しさを感じた。
- ・相互理解を深めるには、「教える／教えられる」という関係性そのものを崩す仕組みが必要であり、対等な立場で行うグループワークや課外活動の導入が有効だと考えた。これらは来年度以降の実施を検討したい。

- ・ボランティアミーティングや対話型への理解を深めるワークショップへの参加者が固定化しており、本当に届けたい層へのアプローチが課題として残った。
- ・外部講師の招聘や、他団体の対話型クラスの見学など、第三者の視点を取り入れることで、説得力を高める余地があったと感じている。

## 課題② 教科書を用いたクラスと異なり、ボランティア側も学習者側も学習の成果を感じにくい。

### <実践内容>

#### (1)「ノート」の改善

- ・学習の成果を可視化することを狙いとして、1回のクラスのはじめと終わりに、当日のテーマについて学習者がどれだけ日本語でアウトプットできるようになったか考える時間を設定した。
- ・ノート内の文言を多言語翻訳し、学習者に伝えるときのボランティアの負担を軽減した。

#### (2)「効果測定シート」の改善

- ・学習効果を可視化するためのレーダーチャートを作成した。
- ・どのボランティアでも同様に実施できるよう効果測定の進め方を明文化し、見本動画を作成した。
- ・日本語能力の高い学習者も効果を感じられるような質問項目を追加した。(例：防災)

### <考えたこと・困難だったこと>

- ・書式を整え、数回説明しただけでは、NICの意図がボランティアに十分に伝わらないことを実感した。
- ・説明や共有の機会を設けても、参加するボランティアは固定化している傾向がみられた。どのようにしてボランティア全体の共通理解・水準をそろえていくかが、引き続きの課題である。

## ◎コーディネーターとして果たした役割

- ・NICの方針を一方向的に推進するのではなく、ボランティアや学習者の声に丁寧に耳を傾けることを心掛けた。
- ・ボランティアの考え方を变えることよりも、無理なく実践できる「仕組み」を整えることに注力した。

## ◎今後の展望

- ・日本語教室の目的や方向性について、ボランティア全員が共通理解を持つことが必要である。「自分には関係ない」と感じるボランティアを減らすため、一人一役制の導入を検討している。
- ・ボランティア会議を、原則参加する場として位置づけることも検討課題である。
- ・外部団体と連携し、ワークショップ等を通じて学びを深める機会を創出したい。

## ◎コーディネーターとして自身が大切にしたい役割

- ・「NIC日本語教室」は名古屋市の指定管理により運営されている教室であることから、対話型クラスの実践についても、先行事例の一つとなることが求められている。地域の日本語教室の参考となり得る取り組みを重ねることで、名古屋市全体の地域日本語教育の充実に、微力ながら貢献していきたい。
- ・NIC直営の「NIC日本語教室」では、NIC職員として、一定の働きかけが可能である一方、地域のボランティア日本語教室と関わる上では、まず相手との関係性やこれまでの経緯を理解することが重要である。「NIC日本語教室」の取り組みと並行して関わっていた地域の日本語教室「日本語多読なごもり」での経験から、信頼関係の構築には時間と継続的な関わりが不可欠であることを改めて実感した。安易に助言だけをするのではなく、足しげく通い、コーディネーターが「敵ではない」存在であることを理解してもらう姿勢を大切にしたい。
- ・自身は、名古屋市が設置している地域日本語教育コーディネーターではなく、地域日本語教育コーディネーター事業を担当するNICの職員である。この立場で成し得ることとして、既存のコーディネーターと連携し、今後は、NICの取り組み(外国人相談窓口機能など)と地域の日本語教室をつなぐ調整役として、引き続き、教室間のネットワークの中に入り、支援していく役割を担っていきたい。